

三水会会報

北里大学海洋生命科学部
同窓会会報 第 67 号

平成26年3月発行

編集者 内藤 文隆

発行 三水会（北里大学
海洋生命科学部同窓会）

事務局 〒246-0031 神奈川県
横浜市瀬谷区瀬谷5-22-1

TEL フリーダイヤル
0120-873-135

目次／相模原校舎風景	P. 1	潜水部OB会／就職ガイダンス講師を担当して	P. 5
近況報告～教授に就任して～	P. 2	水族病理学研究室 最近の風景	P. 6
橘高二郎先生を偲んで	P. 3	『越喜来や』／漁火委員会・学園祭報告	P. 7
平野禮次郎先生を偲んで	P. 3	お知らせ／掲示板	P. 8



完成近い新病院・・・2013年12月撮影



2014年2月14日の記録的大雪が残るキャンパス周辺

近況報告〜教授に就任して〜

水産学部 8期生 岸田光代



今回原稿を依頼され、あらためて数えてみるとなんと卒業して31年が経っていました。あつという間であり長かったようでもあります。

2001年に熊本大学自然科学研究科の講師として採用され2012年より教授として勤めています。自分の専門分野の教育研究以外に、研究科附属の総合科学技術共同教育センターの国際共同教育部門長として、国際プログラムの運営統括を行い、留学生の受け入れや派遣、海外協定校とのネットワーク強化など、大学の国際化に関わる仕事をしています。熊本大学に赴任するまでの約15年間は、海外で学生としてまた研究者として過ごしてきましたので、その経験を生かすことのできる仕事だと思っています。最近では、多様で国際的な教育研究を受けられるように、海外大学と共同で行うダブルディグリープログラムやジョイントディグリープログラムを推進し、留学生の受け入れや派遣に努めているところです。また大学院生に国際的な経験を与えるプログラムの一つとして、学生が運営する「先端科学技術における学生国際会議（IICG）」を開催しています。これは毎年海外協定校で開催していますが、今年度は熊本大学での開

催となり、70人近い海外からの参加学生と共に学術的にまた文化的な交流の場とすることができました。

一方専門の研究では、ゼブラフィッシュをモデル動物として、ステロイドホルモンと初期発生の関係について研究を行っています。主にアロマテースとエストロゲンがドーパミン神経やセロトニン神経に及ぼす影響の解明をすると共に、その生理メカニズムに環境汚染物質がどのように関わるかについて研究を進めています。魚類には脳型と卵巣型の2種類のアロマテースがあり、哺乳類などに比べ脳でのアロマテース活性が高く、エストロゲンが多く産生されていることが知られています。一方、魚類ではニューロンの高い再生力や脳が成長し続けることが知られていることから、これらの生理機能と高いエストロゲン産生能力の関わりを解明することが、神経系に対するエストロゲンの調節メカニズムのさらなる理解へつながるものと考えられます。

現在研究室には4人の大学院生が所属しており、全員インドネシアからの留学生です。ドクターコースの学生2人は、エストロゲン産生の阻害の影響を研究、カドミウムとエストロゲン伝達シグナル経路の関係について研究しています。他2人は昨年10月に来日した交換留学生です。全員ブラウイジャヤ大学の出身ですが、ドクターの学生は理学部、交換留学生は医学部と水産学部とさまざまです。ブラウイジャヤ大学とは交流協定を結び、理学系工学系に毎年何人かの留学生が入学しています。自然科学研究科には150人近

い留学生が在籍し、その多くは英語プログラムに所属し講義も英語で受講しています。

昨年はインドネシアのスラバヤ市にあるスラバヤ工科大学を訪問し、生物学科で講義を行う機会があり内分泌の基礎から研究室での研究結果を織り交ぜた話しをしました。対象の学生や人数が前もってわからず、会場に100人以上集まっていたという光景には驚きました。開きに来てくれた学生は学部3年生が中心ということでした。内容がいったいどのくらい理解してもらえるか不安もありましたが、質疑応答の時間では活発に手が上がり、学生の熱意が十分に伝わってくるものでした。生物ということもありますが、ほとんどが女子学生ということにも驚きました。修士課程もこれからできるということ、研究室はまだ設備も整っていないませんが、豊かな自然環境・資源と若く元気な人材に恵まれ、今後の発展が充分予感される経験でした。

今まで研究室で指導した学生は1人を除きすべて留学生で、昨年帰国したバングラデシユの学生の他は今のところインドネシアからの学生です。以前交換留学生として研究室に滞在していたブラウイジャヤ大学医学部の学生は、帰国後ゼブラフィッシュを飼育



阿蘇ヘフィールドトリップ



ブラウイジャヤ大学でゼブラフィッシュの研究



研究室メンバーでパーティー



スラバヤ工科大学での講義風景

し、マウス・ラットの系から変更しゼブラフィッシュを用いた実験を進めドクター論文を仕上げています。日本に留学して勉強したことが役立つところ、私としてもうれしく思っているところです。現在指導しているドクターの学生は卒業後は母校で講師として働く予定ですので、しっかりと勉強して多くのことを身に付けてもらいたいと思います。私自身も海外で多くの先生にお世話になっていましたので、今日本で留学生の役に立てるといことは本当にうれしくやりのあることだと感じています。

私の最初の海外滞在はイギリスのバース大学のペイカー先生の研究室です。ペイカー先生は水産学部の川内先生の共同研究者で、私が卒論生でこの共同研究に関わったことで、数年後研究員として受け入れてもらうことができました。この経験がその後のアメリカでの学位取得、研究生活へ発展することになりました。川内先生をはじめ研究室メンバーとの出会いがあり、今の自分につながっていることをあらためて感じ、多くを教えていただいたことに感謝します。今は自分が学生を指導する立場ですが、共に学ぶということを忘れずに、日々向上していけたらと思います。

『師匠から心の師匠へ』

19期生 向井 昭博



「怠慢は駄目ですね。」

小生が卒業して二十年経過した今でも心に刻まれている先生よりいたいた言葉の一つ

です。当時学生であり部活中心の私には、甲殻類の増殖技術において世界の最先端を切り開かれておられた、いわゆる『世界の橘高』とも謳われた先生から戴いたこの言葉の意味について分かる由もなかった。ただ、いまだにこの言葉が頭の中に出てくる。私が独立して車海老の養殖を独学で始めたところからこの言葉の意味、奥の深さ、重みに触れることの始まりとなった。

私の学生時代はひどいものであり、言われた仕事をルーチンにしていかに早く終わらせるかという意識でとらえていた。唯一、興味のあることについては、時間が経過するのを忘れてしまい、担当している成体のイセエビが気になった行動をする時、またイセエビ類孵化は夜中が多く、必ずと言って先生の部屋の明かりはついていて。特に三陸キャンパスにおいて海水増殖研究室があった建物では、先生の部屋の明かりが二時、三時で消えていた記憶がない。私はその姿を見ていた。ただ、肝心の研究の進め方や生物の見方については殆ど見ていなかった。当然ながら社会に出て自分で全てを進めるにあたって大変な勉強量が待っていた。やったことがない研究、試験、実験、それぞれの組立て方、進め方、結果の出し方、まとめ方、何が失敗で次につながるのが何なのか、何もかもが手さ

ぐりであり、この事が本当にもがいていたのだと思った。

ただ、「慢心するな」と、あの世界の橘高先生が学会出張等を除く毎夜二時、三時まで時間を惜しまずに研究をされておられたことに、小生は随分支えられ、そして励まされた。

車海老の養殖、放流用種苗の種苗生産、中間育成、放流地点の選定調査、電力会社との共同研究及び事業化の検討等々、また、播磨灘の天然魚のストレスを抜きおいしさを引き出す仕事、商品開発などをやっている事が先生の耳に入りお電話を頂戴した。「向井君は学生の時から想像できないくらい変わったね。よくやっていますね。」思わず涙が出た。話の内容は技術的な話のやり取りであったが、電話を切るまで涙が止まらなかったのを覚えていた。その後、よく先生から電話をいただいた。先生が北里大学を退職され根室市の水産研究所の所長をされておられた時も花咲ガニの種苗生産や植物プランクトン培養について、そして少し愚痴もこぼられておられたように覚えている。少しうれしかった。お怪我をされ、千葉にお戻りになられてからも本を出される事や少し研究をされていることなどお知らせをいただいた。小生も先生へ技術的進め方等ご指導を頂戴していた。大変うれしく、大変ありがたかった。

小生が会社を法人化したとき、先生は会社の顧問をしてくださいました。当時、ベンチャー企業である小生にとつては大変心強く、そして暖かく感じた。小生の結婚式の日時が決まりご連絡した際はお怪我でリハビリをされておられたため、「児玉君に頼んどくよ。」と、軽くおっしゃられていた。当時学部長であられた、あの児玉先生である。私

はいい学生ではなかったのでどうしていいやら・・・当日、式は諸先輩、友人、スキー部の仲間が大漁おどりで盛り上がり、児玉先生が友人のギターを奪い、急遽歌をプレゼントしてくださり、大盛り上がりとなった。児玉先生は「橘高先生に聞いている。俺も顧問になってやるよ。」また、裏で泣いてしまった。現学部長の緒方先生にも顧問や申請で大変お世話になっており、温かい繋がりに大変感謝しております。

そもそも、私が北里大学に入学を考えたのは高校二年生の時。進路指導室に呼ばれ机の上に並んでいた北里大学水産学部のパンフレットが光っていたように覚えている。パンフレットは12〜16部ぐらい並んであったような気がするが他には目もくれず、すぐに手に取りページをめくると橘高先生の研究紹介、フロゾーマ幼生が3Dの様飛び出してきたような感じであり小生にとつては運命だったと思える瞬間の一つである。

最近の水産業界は少し寂しい気がする。産業界、そして教育である。日本の水産分野はいろんな面で順位を落とし、養殖業界に至っては世界的には右肩上がりの生産量にもかかわらず日本においては平行線である。業界はすぐく矛盾のある中で暗闇にもがいているようにも思える。橘高先生、そして先生の師匠で有られる藤永先生らが切り開かれた車海老の養殖、産業の発達が停滞した今新たな研究や技術開発が生まれるのか・・・勿論、魚群探知機等の技術は世界的なものであるが、近い将来、より寂しい状況になるのが見えてしまう。未来ある水産業は夢のある世界であり夢を描ける人材を育てる事が大切に思う。技術だけではなく、

本当の意味で産学連携をする時が来ているように思える。是非、北里大学海洋生命科学部にその中核を担っていただきたいと心より願っております。小生の心から先生の声が聞こえなくなる日はない。

平野禮次郎先生を偲んで
水産増殖学科十七期生
山本 宇宙

平野禮次郎先生が、平成二十五年七月一日、東京で八十五年の人生を閉じられました。

平野先生は昭和三年五月一日に東京にお生まれになり、昭和二十六年三月東京大学農学部水産学科を卒業、大学院に進まれ、昭和二十九年文教官助手・水産増殖学講座、同三十八年助教・農学部付属水産実験所、同四十三年水産増殖学講座に配置換えを経て、同四十九年より教授として水産海洋学講座を担当されました。そして、平成元年から平成六年まで北里大学水産学部教授を務められ、同四年から二年間は学部長、同九年から十二年までは北里学園理事の重責を全うされました。学内外の各種委員も歴任されました。先生の代表的なご研究は、水産増殖におよび沿岸生物環境に関するものですが、水質学、プランクトン学、付着生物学など海洋学分野の基礎科学に根差した展開を特徴とされています。



北里大学水産学部（現海洋生命科学部）では、海洋基礎生産学研究室（現水圏生物学研究室）を立ち上げられ、三陸町を研

究拠点とされました。また、岩手、青森、宮城、福島などの様々な研究所、水産試験場および栽培センター等とも協力関係を築いておられました。我々不肖の学生にも、三陸海岸ならではの壮大な卒論テーマを与えられ、悪戦苦闘する者も少なくありませんでしたが、先生は絶えず温かい目で見守り、指導してくださいました。先生は「あー私たちは研究者じゃないんだから」とよくおっしゃられました。結果よりも、そこへ至る考える過程こそが重要であることを教えていただいたように思います。より深く考える、考えようとするこの大切さを、社会に出てから身にしみ感じていきます。

会議などで東京へ出張されることも多かったのですが、毎回、文明堂のカステラを手土産にお帰りになられました。先生は車を運転されませんでしたので、夏は新幹線の最寄り駅である水沢江刺まで、冬は雪で山道は危ないというので釜石まで、学生がお迎えにあがっていました。車のガソリンとともに胃袋まで満タンにして頂けるので、お迎え役は大変人気がありました。

「今日は軍資金が入ったから、何人でもいいから連れてきて下さい」と連絡が入ると、大船渡か釜石で宴会です。なぜか、焼肉が多かった様に思います。いつも腹ぺこ状態の我々学生は、それは凄まじい勢いで食べるのですが、先生は平然と「どんどん頼みなさい」、そして、皆お腹一杯になって箸が止まったところで、「じゃあもう一枚、盛り合わせを頼みなさい」とおっしゃられるのです。そんなわけで我々はいつも喉元くらいまで食べさせていたのですが、先生ご自身は三切くらい召し上がるだけで、がつつく我々の姿を肴に、笑顔でお飲みになら

れていました。飲まれるほどに「あーたねえ」と様々なお話をしてくださいました。そして「一曲だけ歌いましょうか」との合図で二次会に突入、一軒では終わらず、たいがい午前様になっていました。

前夜どんなに飲んでも、先生は翌朝には研究室にいらつしやいました。当時助教の小河久朗先生からは「平野先生にあまり飲ませるな」と怒られていましたが、私がお世話になった三年間（学部四年生時と修士課程の二年間）はずっとこんな感じでした。そして、酒席での平野先生のお話が、学問を超えた人生の講義でした。研究室メンバーによる花見やバーベキューも楽しい思い出で、平野先生は、小河先生や加戸隆介先生のご家族も参加されやすいよう配慮されていました。

平野先生のもとには、多方面で活躍されている大勢のお弟子さんが訪ねてこられました。先生はその方々に私を「彼は養殖会社の息子なんだよ」と紹介してくださいました。一人ひとりの学生の個性や境遇を踏まえたご指導方法の一環だったと思いますが、第一線で活躍中の蒼々たる方々と接する機会を得られたことは、私にとって大きな刺激となりました。

修士課程修了後は、養殖業者にとつてまだ「夢」の領域だったクロマグロの種苗生産について勉強したく、平野先生に相談申し上げたところ、日本栽培漁業協会八重山事業所（現水研センター）西海区水産研究所石垣庁舎）で研修できることになりました。同協会の本間昭郎専務理事（当時）と話をしてくださり、北里大学との共同研究という形で受け入れていただけることになったのです。

約二十年前の当時、クロマグロの種

苗生産には、日本栽培漁業協会、近畿大学、マルハ（現マルハニチロ水産）、日本配合飼料の四機関が取り組んでいましたが、大量採卵が安定的に行えていたのはマルハの奄美大島にある養殖場だけだったと思います。日本栽培漁業協会八重山事業所ではキハダマグロの採卵実績はありましたが、クロマグロの受精卵は確保できず、そのため他機関から譲り受けた受精卵で飼育試験を行っていました。そのため知見も限られていましたが、研修修了後に平野先生に報告に伺うと、「いろんな人と知り合いになれたことが最大の収穫ではないか。それが将来きつと役に立つ」とおっしゃられました。

私はその後、父が経営する養殖会社（拓洋）に入社し、まずは奄美大島の工場でマダイの種苗生産を担当したのですが、その頃に何度か、平野先生が日本栽培漁業協会の仕事で同協会奄美事業所（現水研センター）西海区水産研究所奄美庁舎）に求められる機会があり、その度に私を呼び出してください、奄美事業所の職員の方々と先生を囲んでの懇親会となりました。前述の八重山事業所の方々とともに、その後のクロマグロ種苗生産研究の中核を担っていかれた皆さんであり、平野先生のお言葉通り、一連のつながりが当社の事業展開にも大いに活かされました。すなわち、クロマグロの種苗生産や養成技術の研究が活発化するなかで、当社も平成九年からクロマグロの養殖を開始し、種苗生産にも挑戦するようになり、日本栽培漁業協会の方々などと学会や会議で一緒にさせていただく機会も増えましたが、当時のよしみもあって可愛がっていただき、技術的なアドバイスも頂くことができ、大変役立つ

ています。そして平成二十四年に、当

社でも完全養殖に成功しました。当社でのクロマグロ完全養殖成功について、平野先生には葉書でご報告しました。是非お会いしてお話しもさせていただきたいと思っていたのですが、突然の訃報を受け、叶わぬ夢となったことを知りました。けれども、我々が作った完全養殖クロマグロをどうしても先生にご覧いただきたく、東京世田谷の斎場へ向かう際、サンプル瓶に入れて持参しました。穏やかに微笑むお顔写真を拝見し、改めて悲しみがこみ上げてきました。駆けつけた懐かしい顔ぶれとともに最後のお別れをさせていただきます。

当社には現在、平野先生の弟子二名と孫弟子二名がいます。我々は、完全養殖したクロマグロを世界中の食卓へお届けし、「美味しい」と喜んでいただくことで、平野先生へのご恩返しをしていきたいと思っています。あと数年で量産化のめどが立つと思います。斎場でご覧いただいた完全養殖クロマグロは、先生が礎を築かれた北里大学海洋生命科学部水圏生物学研究室に寄贈させて頂きました。

学者として水産学ならびに水産業の発展に資する様々なご研究成果をあげられ、また教育者として多くの人材を育てられた平野禮次郎先生のご功績とご人徳を称え、謹んで哀悼の意を表します。



長い間ひとかたならぬお教え、お導きをいただきありがとうございました。安らかに眠りください。合掌

潜水部OB会

第32期 水圏生態学研究室

阿高 麦穂

去る11月3日(日曜日)埼玉県志木市にある「浜の台所 越喜来や」で潜水部主催によるOBの集いが行なわれました。今回は潜水部だけでなく、広く水産学部(現海洋生命科学部)のメンバーを含めた、総勢32名の方々の参加があり私もOBの一人として参加させていただきました。卒業以来、第二の故郷への思いを同じくする皆様とご一緒する機会を得ましたことは、大きな喜びです。井田先生を始め高橋先生も駆けつけていただき、多いに盛り上がりました。今回の集いでは三陸での武勇伝や思い出話に花が咲き、20歳も離れる先輩方と同じ話題で杯を酌み交わすことができました。時代の変化を感じさせない愛すべき三陸を再確認する場でもあり、そんな先輩方に囲まれないながら、現役生も加わり相模キャンパスの学生生活など様々な話をすることができました。現役生、OBで繋がり

合いが持てたことは今後さらなる結束と絆よつてこの集いが盛り上がることでしよう。

また、今回の集いでは、私も参加している潜水部OBが中心となって震災後から行なっている海底清掃ボランティア「リトル越喜来」の活動報告も行ない、皆様から活動への支援金5万円(物販、寄付金)をいただきました。今後三陸への恩返しに役立てて行きます。東日本大震災から三年が過ぎようとしております。漁村コミュニティのなりわいの中で生活し、水産を肌で感じた最高の学生時代でした。漁師さんからの魚介類の差し入れは他では味わえないうまさでした。そんなお世話になった地域の為に「何かできないか?」という思いで、潜水部で培ったスキルで海底清掃活動を震災後から行なっています。皆様のご支援のおかげで、海はきれいになりつつあります。お寄せ下さったご厚志並びに励ましの言葉に、心より感謝申し上げます。

就職ガイダンス講師を担当して

35期生 松崎 愛

平成25年10月24日(木)に北里大学海洋生命科学部同窓会(三水会)より、卒業生の就職経験や職業紹介等を含め、実社会の体験談を先輩たちに伝えてほしいということで、在学生に対し、卒業生による「就職ガイダンス」に出席させていただきました。

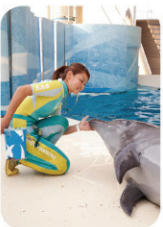
私は現在、新江ノ島水族館の展示飼

育部海獣類チームに所属しています。大学4年の11月に内定が決まり、働き始めて今年で5年目となります。小さい頃からの夢であったイルカの調教師になりたいという思いで、北里大学水産学部(現海洋生命科学部)に入学しました。しかし、実際のところ、私自身何を行ったらイルカの調教師になれるのかわかりませんでした。そこで、私と同じ想いをしている学生が多いのではないかと思い、少しでも参考にできれば良いなと講演させていただきました。

質疑応答では、「北里大学卒業生の水族館職員同士での交流はありますか?」「在学中にどんな資格を取得しましたか?」「水族館は何園館受けましたか?」という内容でした。これらの質問から、学生が興味を持っていたことは、やはり「水族館に就職するために何をしたら良いのか」ということでした。

私からも、いくつか質問させていただきました。

「私の就活体験・職場紹介」というテーマで、3年生、4年生、大学院生を対象に、40分程度お話しさせていただきました。内容は、仕事場所、飼育を行っている海獣類、水族館で行う主な仕事内容、一日のスケジュール、動物の健康管理について(体温測定、体重測定、血液検査、超音波検査、尿検査、当館で行っているショーの紹介、トレーニングの例として、鰭脚類のボールバランスのつくり方の説明、水族館に就職するために、在学中に行ったこと、実際に水族館で働いて感じたことなどです。この中で、学生の反応が一番良かったのは、最後にスライドに映したイルカやアシカの写真でした。やはり難しい話よりも、動物の写真の方が癒されるようです。写真をみて「可愛い!」という反応に、少しは学生の興味を引けたかなと感じております。



「可愛い!」という反応に、少しは学生の興味を引けたかなと感じております。



要です。水族館で働くようになって驚いたことは、実習やボランティアに参加する学生が大勢いるということ。水族館職員になって、改めて職員になるための競争が激しいことを実感しました。私も学生の頃、実習に参加しましたが、さまざまな部署の方とお話ができ、貴重な情報収集ができました。また、顔と名前を覚えてもらうことによつて、採用試験の際、より自分をアピールできると思います。当館の実習やボランティアに参加する学生の中には、長期休暇を利用して、複数の園館に参加する方もいます。「水族館に内定が決まりました！」と報告にくる学生は、このように、自ら積極的に行動している人が多いように感じます。

最後に、私自身、仕事内容に関して講演するのは初めての経験でしたので、なかなか上手く伝えられていない部分もあったと思います。この機会を通じて、同じ夢を持った皆さんの就職活動に少しでも役に立てば幸いです。

水族病理学研究室 最近の風景

北里大学海洋生命科学部
准教授 中村 修

3年前の震災は、もちろん私にとっても大きな出来事でした。大きな喪失感を味わいましたが、いろいろなことを考えましたが、とりあえず今は仕事に打ち込める環境にあることをありがたく思います。ご支援や励ましを下さった多くの方々に、改めて感謝申し

上げます。

しかし忘却というのは恐ろしいものです。嫌なことを忘れるのは人間にとつて大事な能力ではありますが、この新校舎で仕事をし、相模原市で生活していると、三陸のこと、被災地のことを思い出すことが少なくなつてきている自分に気がつきます。それは当然の変化ではあるのですが、被災地のこと、そして本学部の在校生や卒業生、職員のご家族にも震災で命を落とされた方がいたことは、決して忘れてはいけません。

長年私が研究対象としてきたオキタナゴは、幸いといつかんと言おうか、こちらの海でたくさん集めるのが難しいので、それを理由にして、毎年夏には何度か三陸を訪れています。昨年度は4年生は震災当時2年生、三陸から避難してきた学生たちですから、是非とも震災後の三陸に連れて行きたかった。ということ、夏、オキタナゴのサンプリングの時には全員を三陸に連れて行き、数日間宿泊しました。おかげで研究費が吹っ飛びました。

病理学研究室の経営状況では残念ながら規模を縮小せざるを得ません。今



我々の復興拠点 大船渡屋台村

年度は一回につき若干名としましたが、なぜか必ず毎回、筒井先生がついてきます。三陸LOVEですね。筒井先生がいると毎晩宴会で大変ですが、私の研究では三陸の復興に何の役にも立てないので、せめてもの復興支援のつもりで屋台村で散財しています。大船渡市は陸前高田市や大槌町などに比べればまだしも復興が進んでいるように見えますが、プレハブの屋台村ではなく、本當の街が復活する日が早く来ることを祈らずにはられません。

水族病理学研究室は、あいかわらず私と筒井先生の二人体制です。筒井先生はいまだ結婚する気配がなく、貯金もせずに飲んでばかりいるので心配です。それでもとうとう40代に入ったので、これからは大人の自覚が出てくることでしょう、きっと。そして早く結婚して、人生の苦勞を味わってほしいものです。

この原稿を書いている今は、卒論発表会のおよそ3週間前です。発表会は何年か前から増殖学研究室と合同で行っています。合同でやる以上は内容で勝たなければならぬので、先日、研究室内にZ旗を掲げ、「各員一層奮励努力セヨ」と奮起を促しました。しかし、学生たちはあまりピンと来いていない様子です。むー、日本海海戦も「坂の上の雲」も知らんのか、君たちは。「えーと、本日は晴天なり、とかいうやつですか？」それは運動会のマイクテストだ、O野君。でも「本日」と「天」と「晴」が出ただけ立派かなあ。Z旗の効果はわかりませんが、やっと昨日

あたりから緊張感が高まってきたような。がんばってくれたまえ。

発表会が終われば、今年度もほんどなく終了です。いつも、ああ、もう少し時間があれば、というところで一年が終わり、学生が入れ替わってまたゼロから始め、まともなデータが出るようになるのはやっと秋くらいから。そんな繰り返しが続いているような気がします。神から罰を与えられて、山の頂に岩を押し上げる行為を永遠に繰り返すシーシュポスの神話って、こんな感じなのでしょう。あともう少しというところで、岩は必ず転がり落ち、シーシュポスはまた麓に戻ってこの行為を始めなければならない。シーシュポスは幸せなのだ、と言ったカミュは偉いけれど、岩を頂上まで押し上げられたらもつと幸せじゃないのかなあ。

いや、たとえ研究結果だけ見ればシーシュポスでも、学生諸君は一年間の卒論研究できっと大きく成長したに違いない。科学的な考え方とか、プレゼンの仕方とか、いろいろ学んだと思うのですが。そうだよな？ そうだよ。言ってくれ。

また来年度もがんばります。



2013年夏。吉浜湾をバックに。

『越喜来や』

F F14期 大坪 孝志

『越喜来』という地名はそこに住んだことのない、あるいは触れたことのない人には容易に読めない地名と思いますが、その地名を遣った居酒屋が現れ我々を驚かせました。2012年、夏のことです。埼玉に住む同窓の友人がそれを知らせてくれました。

震災後三陸への 想いが引き寄せあつた水産の卒業生、現役生ら数名で「なぜ、ここに越喜来？」と興味本位に押しかけました。そこには、岩手のお酒、そしてあの三陸の懐かしい味がありました。我々は嬉しくなり、まるで三陸に帰つた気分です。料理と酒を楽しんでいるとお店の女性が「来て頂いてありがとうございます。瀬尾佳苗の母です」と自己紹介をされました。当然誰もが知つているお名前です。震災当時のお話を、そして我が娘は三陸に嫁いだのだ！と、その三陸との繋がりを切らないために、また三陸への恩返しのために三陸の素材を使ったこの『越喜来や』という料理屋を埼玉県志木市にご友人と共同で開いた経緯をお話下さり私達は胸を話ませました。



それ以降折に触れこの「越喜来や」さんに、季節ごとの三陸の味を懐かしみにお邪魔しています。晩ご飯のために足繁く通う仲間もいま

す。クラブのOB会もここで催しされています。必然とも言える不思議な縁で水産学部卒業生の佐藤瑠美さんが今年からお店で勤め始め今は台所を任せつつあり、実は彼女目当てに通つている輩もいる様子で変な虫がつかない心配もしているのですが、彼女の料理の腕前と明るさはますます人を惹きつけていくのでしょうか。

大学関係者以外にも大船渡、三陸に所縁のある方々もよくお見えすることです。もしかすると、直接、間接的に知る昔の知人が隣のテーブルで酔仙に舌鼓を打っているかもしれない。また悲運にも津波の犠牲となつてしまつた佳苗さんが、世代を超えた(親子ほどの差!)我々卒業生の繋がりを紡いでくれているように思えてなりません。お店は池袋から東武東上線急行で20分程の志木駅下車、徒歩5分と東京からは行きやすい場所にあります。遠方の皆様も東京においでの際は、是非立ち寄つてみてください。

漁火委員会「北里祭」報告

漁火委員会委員長 3年

高橋 良広

この度、平成25年11月2日(土)、3日(日)に開催いたしました第51回北里祭は秋日和の中で行われました。以下の通り、第51回北里祭会場内に漁火ブースを出店したことを報告いたします。

漁火ブースでは例年好評であつたイ

カとツブ貝の炭火焼と三陸地方の特産物を扱つた物産展と三陸遠征についての展示を行いました。

当日は、海産物を使った炭火焼は終始長蛇の列で両日共に完売しました。お客さんの中には「去年売り切れで買えなかつたので早めに来ました。」というお声や「毎年楽しみにしていて、今年も学祭に来たらまずここから決めて来ました。」と言つてくださった方もおり、この企画を開催でき委員一同心より充実感や満足感を感じました。

物産展の方では、あまちゃん格好がかわいいと好評でした。また、今年には出品する商品も変えて、浜のミサングワやわんこくんシール、あまちゃん南部煎餅の販売を行いました。呼び込みや宣伝を行い、仕入れた商品は、予

想以上の売れ行きでした。

この度のブース出店に際してご協力いただいた北里祭実行委員の皆様、薬学部ボランティア団体PFUの皆様、海洋生命科学部潜水部の皆様、職員の皆様、約半年間苦業を共にしてきた仲間一同に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

なお、第51回北里祭の成功は私どもの漁火企画に賛同してくださった三水会様のお力添えをもって成しえたものです。深甚なる感謝を致しております。漁火委員会を代表して心より御礼申し上げます。また三水会様には、今後引き続き、漁火ブースの更なる飛躍のために今後もより一層のご高配を賜りたく重ねてお願い申し上げます。なお、今回の本ブースにおける純利益及びご寄付いただいたお金は岩手県大船渡市役所に義援金として寄付させていただきます。文末であります。添えてご報告させていただきます。

学園祭参加の報告

海洋生命科学部北里会

執行委員会委員長

井上 諒

遅ればせながら、学部北里会の学園祭参加活動についてご報告申し上げます。

今年度も例年通り下記の日程において北里大学各キャンパスの学園祭に参加いたしました。

10月12日および10月13日に十和田



岩手の物産展はMB号館1階で展開。



漁火表示のテント下にて、ツブとイカの炭火焼き。



キャンパスにて紅葉祭

10月26日および10月27日に白金キャンパスにて白金祭

11月2日および11月3日に相模原キャンパスにて北里祭

これらの活動に多大なるご支援をいただきまして、誠にありがとうございます。

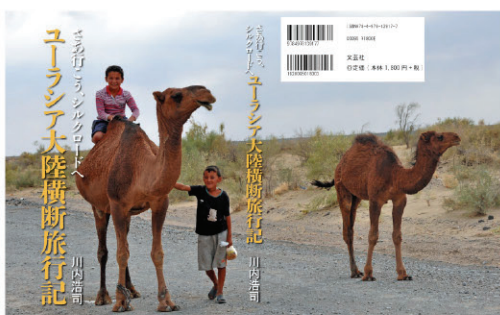
当初、サンマに加えてホタテの販売も予定しておりましたが、震災以降ホタテの漁獲が芳しくない状況のため仕入れることができませんでした。しかし、サンマの炭火焼につきましては大変ご好評をいただき、全ての学園祭において無事に完売いたしました。皆様に三陸の味覚を楽しんでいただくことができ、大成功に終わることができました。

これからも海洋生命科学部北里会執行委員会は白金キャンパスにおける白金祭、十和田キャンパスにおける紅葉祭に学部北里会の代表として参加することで他学部との交流を続けていく所存でありますので、今後とも変わらぬご厚情とご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。



お知らせ ユーラシア大陸横断旅行記刊行

川内浩司北里大学名誉教授（水産利用学・海洋分子生物学）が『さあ行こう、シルクロードへ ユーラシア大陸横断旅行記』を文芸社から上梓されました。写真が豊富で資料としても貴重な書籍です。定価は1,800円＋税。詳細は次の三水会報でお知らせいたします。



“ 掲 示 板 ”

■ 平成26年度三水会定期総会のご案内

下記により平成26年度三水会定期総会を開催します。

理事、代議員はもとより一般会員も傍聴できますのでご参加ください。

開催日時：平成26年5月17日（土）午後5時30分～（受付5時）

開催場所：北里大学白金キャンパス 薬学部1号館5階1507教室

（注）：開催場所は大学の都合により変更される場合がありますので、ご参加の方は事務局までご確認ください。

- 議 事：1、平成25年度事業報告及び収支決算報告
 2、平成26年度事業計画及び収支予算
 3、その他

編集後記

昨年、学校法人北里研究所は研究所創立100周年×大学創立50周年の記念イベントを東京フォーラムで開催いたしました。節目となる記念行事も盛大に執り行われ、大学としての歴史が今日まで刻まれてきたことに改めて気づかされた思いです。大学病院も2013年12月に無事竣工を迎え、2014年5月には開業となる予定です。東日本大震災で大きな被害を受けた三陸においてもキャンパスの活用が震災後も継続しています。三陸での生活を知らない学生がこの春卒業を迎えます。2014年度のカリキュラムには三陸での海洋実習が組み込まれることになりました。多くの学生が参加を希望しております。実体験が無いにもかかわらず、三陸に関心を寄せる学生が多くいるということは大学の歴史が、そして学部の歴史がその重さを増してきた証左かもしれません。